

# 役に立つかもしれないシリーズ 3 「必死」

名古屋名駅ロータリークラブ 直前会長 藤井 圓隆

人は、必ず亡くなります。必死であります。

ここから、宗教は始まるのでありますが、ここが帰着点でもあります。すなわち、はかない必死の人生ではありますが、必死であるからこそ尊いということです。

釈迦の出家の動機は、死から逃れたいということでした。で、結論は死からは逃られないというのが悟りであります。簡単に言ってしまうとそれだけのことです。

では、それでは今、何をなすべきか。仏教はそれを教えるわけであります。

わたくしは、若輩者の天台の坊主ですが、偉そうなことを言わせていただければ、それはこの瞬間をいかに精一杯生きるかに尽きるのであります。お経の中には明確に、これを言っております。

「生死即涅槃」（しょうじそくねはん）すなわち、生死の問題にあがき苦しみを抜くことそれが即ち涅槃である。「煩惱即菩提」（ぼんのうそくぼだい）ということでもあります。天台本覚論という難しい議論がありますが、簡単にいうと、一生懸命生きていることそれ自体が尊い。それがそのままに仏であるということです。

わたくしは、昭和53年11月に比叡山に登叡を許され、比叡山横川行院で修行をいたしました。朝2時に起床し、午後8時の就寝まで、殆どが読経三昧の毎日です。これが1箇月も続きますと、毎日こうしてお不動さまの前でお経をあげている自分は一体なんだろう・・・という気分になって参ります。

それこそ名誉も地位もお金も何の役にも立たない、この修行の場では、ただただ自分を見つめ直すしかないのであります。そして、わかってくるのが、自分の小ささであります。大宇宙に抱かれた小さな自分の傲慢さです。そしてすべてのものに対して、優しくなっている自分に気づきます。小さな事、物、現象、すべての人に対して優しくなれるのであります。非常に不思議な境地であります。

仏の前では、何もない自分に恐れいるのであります。

こういう境地で生きていれば、無駄な衝突や、言い争い、ましてや戦争なんてことは絶対に起こらない。そういう境地であります。

仏教の根本動機は「死」であることは、昔からよく言われることです。生があれば死がある、生がなければ死もない、しかし同時にそれは裏返して見ると、死があるから生がある、死がなければ生もないということにならなければならぬ。

この逆転の自由さえ体得すれば、生死のうちにあって生死を超えることができるわけです。死がなければ生もない、だから真に生を得て死を免れるためには生を捨てるということ、すなわち必然に臨めば進んで自由に死ぬということ、約言すれば、死の覚悟が死を離脱する所以であるわけです。死の覚悟とは、敷衍すれば、生きながら自ら進んで死に、死につつ生きるということですから、それは生と死の矛盾そのものになるということでもあります。これを禅では、「大死一番」というわけです。



「必死」であることを、心して毎日生きて行きたいものであります。